「南中ソーラン」の今日的意義と課題の検証①

佗美俊輔・若原幸範

●要約

稚内市立稚内南中学校で誕生した「南中ソーラン」は、1993年に開催された第10回「民謡民舞大賞全国大会」においてグランプリ（内閣総理大臣賞）を獲得した。それ以降「南中ソーラン」は様々なメディアやイベントで取り上げられ、2015年にはミラノ万博で演舞された。今日、「南中ソーラン」は、稚内というローカルから出発し、世界へと発信されている郷土芸能の１つである。

本稿は「南中ソーラン」を「郷土芸能（文化活動）」の１つとして位置づけ、その今日的課題の解決に向けた基礎的な方向性を提示することを目的とする。本稿では、保健体育の「ダンス領域」に留まらず、学校と地域を包摂した「地域づくり」の視点を取り入れた重層的な分析と考察を試みる第１報である。

●キーワード

南中ソーラン
郷土芸能
若者
ダンス
社会教育
学校教育

はじめに

「かまえ！」

一瞬の静寂ののち、「稚内南中学校－学び座－」と描かれた濃紺の「舞祝着（まいわいぎ）」をまとった中学生たちが、観客の手拍子に合わせながら一斉に踊り始める（写真１）。「波」、「櫓漕ぎ（ろこぎ）」、「かいぐり」、「綱引き」などのニシン漁をモチーフとした名称が着けられた踊りに、伊藤多喜雄氏によるロックなソーラン節の旋律が調和する。

稚内市立稚内南中学校で誕生した「南中ソーラン[(1)]」は、1993年の第10回「民謡民舞大賞全国大会」においてグランプリ（内閣総理大臣賞）で獲得し、その後も映画「稚内発－学び座」、TV ドラマ「３年Ｂ組金八先生」、「NHK 紅白歌合戦」など様々なメディアで取り上げられた。さらに2010年の上海万博、2015年のミラノ万博で演舞されるなど、稚内発の「南中ソーラン」は、世界へと発信される「郷土芸能」の１つと認識されるようになってきた。稚内市内においても３年に１度「南中ソーラン全国交流祭 in 稚内」、それ以外の年には「子ども芸能祭・南中ソーラン祭」が開催されるなど、市内や宗谷管内の各学校において「南中ソーラン」に取り組み、それを披露する場面が増加している。

写真１．稚内南中学校の「かまえ」の様子（「南中ソーラン全国交流祭 in 稚内2015」にて撮影）

上述したように、今では「南中ソーラン」という名称は、道内外、さらには世界へと発信され、その知名度は拡大を続けている。「南中ソーラン」という名称に関しては、稚内市立稚内南中学校（以下、「稚内南中学校」とする）の公式サイト、ならびに稚内南中学校の創立60年記念誌である『若き希望に～稚内南中の理屈のない教育実践～Ｑ＆Ａより』（2012）の中で、その経緯について示されている。

> 南中では、正調（ソーラン）の時も、Ｔシャツの時も、その踊りは、「ソーラン」あるいは「ソーラン節」と呼んでいました。話の都合で南中以外の方々が、「あの南中のソーランは～」というふうに言われることはあっても、南中の側から「南中ソーラン」と呼んだことはありません。ソーランは、誰が歌おうと踊ろうと、あの歌詞とリズムであればソーランだからです。
>
> １年に１度、総合文化センターの大舞台で発表し、親や地域の方々、仲間から拍手を受けることが一番大事なことでした。文活（文化活動発表会）以外でソーラン踊ることはまったくありませんでした。

しかし、「日本民謡民舞大賞」でグランプリを受賞してから、知名度は一気に上がりました。

学校には、無数の電話やファックス、手紙を通じた激励や振り付けや衣装に関する問い合わせ、中には「これがあの踊り発祥の学校ですか」と訪ねられる方が今もいらっしゃいます。

学校の外で符帳のように使われていた「南中ソーラン」の呼称が、いつの間にか通称となるのに時間はかかりませんでした。それは、全国の学校現場で踊られるようになったからでしょう。南中以外が、この名前を必要としたのです。それまでのソーランと区別する形で、自然発生的に「南中ソーラン」と呼ばれ始めます。

逆に、この何の変哲もない中学校名を冠した名称が、先生と子どもで感動をつくる、学校と親と地域の協同で子育てをすすめる、こうした文化を普通の中学校が発信できるという教育や文化の本質を、感動と勇気を持って全国に広げていることも大事な側面でしょう。

「南中ソーラン」は今や固有名詞ですが、全国では南中とそれぞれの学校が、自校の名前を冠した「○○ソーラン」を自校の誇りとしているのは大変に素敵です。南中で生まれた文化が、その名称とともに全国に広がったのは大きな誇りです。南中では第16回文活から、現在の踊りを「南中ソーラン」と呼ぶようになりました。（（　）の補足は筆者らによる）

「南中ソーラン」のように、地域に根差した「郷土芸能」と「教育（学校教育）」の相互作用に目を向けた知見は、これまでにも報告されている。例えば、大塚美栄子らに（1993）よる北海道朝日町（現士別市）の「瑞穂獅子舞」、足立重和（2004、2010）による岐阜県郡上市郡上八幡の「郡上おどり」、阿部未幸（2014）による岩手県岩泉町「中野七頭舞」などの事例研究が報告されている。これらの先行研究によると、郷土芸能・文化活動は「自分が生まれ育った土地への愛情を持つ」、「地域の伝統を理解する」ことに寄与しているとされる。さらに伝統芸能を「身体」を通じて直接的に体験することは、「学習者の感受性や価値意識」、「地域アイデンティティの形成」や「郷土愛」の定着に寄与に役立つとされる（桂、2009）。

ところで、筆者らは、稚内市で誕生した「南中ソーラン」について、下記の４つの関心と問題意識を持っている。第１に、本学「スポーツⅠ」履修学生の「南中ソーラン」に対する意識への関心である。筆者（侘美）の「スポーツⅠ（１年生対象）」の授業では、３年前から「稚内南中学校」の教員、「南中ソーラン連」在籍者を外部講師として招き、「南中ソーラン」を授業の一環として取り入れている。稚内市やその近郊の出身者の多い本学学生ではあるが、同時に他地域から入学してくる学生たちも少なくない。「南中ソーラン」を「当たり前」と思い実践してきた学生と、「初めて体験する」学生との思いが交差している。そこで初めて稚内の「郷土芸能としての南中ソーラン」を体験する最初の機会になるものと推察される。こうした学生たちの意識を調査することで、「地域内外の子ども・若者が『南中ソーラン』をどのように受容しているのか」が明らかになるものと推察される。

第２に、「子育て運動」と「南中ソーラン」の関係性への関心である。メディアを通じて「校内暴力などの『荒れ』の中で生まれた」、「『南中ソーラン』を通して中学校が更生した」という話は、日本国内で広く認知されているステレオタイプな認識である。ところが、前掲の「創立60年記念誌」では、「（ソーランによって学校が更生したという事実について）そんなことは、まったくありません」と明確に否定している。つまり、メディアを通じて広まった「南中ソーラン」と、実際に稚内市内の教育関係者

によって実施されてきた「南中ソーラン」との間には乖離があるのではないと考えられる。前掲書の中では、「街づくりと『南中ソーラン』」として、南中ソーランが南中教育の１つとして明確に位置づけられ、単に学校教育の領域に留まることの無い社会的意義を秘めていると推察される。他方で、稚内市は「子育て運動」を中心に子どもたちの「地域の教育力向上」に努めており、それが同時に「地域づくり」としての柱にもなっていることは、名古屋大学教育学部教育経営学研究室「宗谷ゼミ」の継続的な調査とその刊行物である『地域教育経営に学ぶ』、恒吉紀寿（1993）、吉岡亜希子（2010）などにより明らかにされている。しかしながら、こうした先行研究の中において、「南中ソーラン」と「子育て運動」の両者が明確に位置づけられているとは必ずしも言えず、今日まで継続しているこれらの活動の本質的な関係性を明確にしなければならないと考える。

第３に「南中ソーラン」の今日的課題への関心である。周知のように稚内市内の各学校（幼稚園から中学校まで）では、「南中ソーラン」が「保健体育（幼稚園は「健康」）」や「総合的な学習の時間」の教材の１つとして実施されている。しかしながら、教育関係者によると「『南中』という名称に対する他校からの反発」などから「南中ソーラン」の実施に批判的な声も聞こえてくる。「保健体育」を中心に取り組まれてきた「南中ソーラン」と、稚内市の伝統芸能の１つとして拡大を続ける「南中ソーラン」との間に距離感が生まれ始めていることへの関心である。

第４に、高校生を中心に組織されている「南中ソーラン連」への関心である。「南中ソーラン連」は、2010年の上海万博への参加を契機に、高校生～20代前半の若者を中心とする40人前後の団体で組織された団体である。主に地域からの依頼による演舞を行っており、稚内市内における各種お祭りや、成人式などで演舞を披露している。近年では、「YOSAKOI ソーラン祭り」、「稚内みなと南極まつり」や、道内各地における演舞を行うなど、その若者たちの主体的な活動は広がりを見せている。さらに「稚内市文化協会」への登録も視野に入れるなど、「稚内の文化・伝統芸能」として残そうとしている。現在多くの地域、とりわけ過疎化が進行する地方都市では、「ハレとケ」の融解により、伝統芸能や文化活動の衰退が顕著である。地域文化の衰退や、グローバル化の進行を受け、地域の郷土芸能は危機的な状況にある。こうした社会的状況において、地域の郷土芸能を守り育てる行為を若者が主体的に実施していく点は、今後の「地域づくり」や、「生活の場」を守るという点で非常に有益なものと考えられる。しかしながら、ここ数年は活動基盤の不安定、担い手の不足などの新たな課題にも直面している。こうした状況下においても、彼／彼女らがなぜこのような活動を継続しているのか、地域の若者の意識、考え方への関心である。

上記を踏まえた筆者らの関心と問題意識を整理すると、下記の3点になる。①地域内外において現在の子ども･若者たちは「南中ソーラン」をどのように受容しているのか、②「子育て運動」（地域教育）および地域づくりにおける「南中ソーラン」の本質的な意義は何か、③ローカルなコミュニティから発生した新しい郷土芸能・地域文化が広く受容されていく過程と、その過程において生じる矛盾は何か、である。

以上のような問題意識に立脚し、本稿では「南中ソーラン」を「郷土芸能（文化活動）」の１つとして位置づけ、その今日的課題の解決に向けた基礎的な方向性を提示することを目的とし、単なる「ダンス領域」を超えた、学校と地域を包摂した「地域づくり」の視点を取り入れた重層的な分析、考察を試みる第１報である。「子育て運動」や「南中ソーラン」を黎明期から学校現場で支えてきた世代

が徐々に定年退職を迎え、教育の第1線を退こうとしている。本稿は、こうした世代がリタイアする前に「今日的な現状と課題」を把握することにより、稚内の教育力の向上に資する「南中ソーラン」の基礎的な方向性を提示しようとするものである。

１．本学学生へのアンケート調査から

本章では、現職教員へのインタビュー調査の結果を下記に提示する。本章における調査は、2015年４月～７月に実施した。調査者の選定に当たっては、佗美の「スポーツⅠ」を履修していた１年生19名、４年生１名への調査を3度実施した。スポーツⅠは、「マイ・スポーツの発見」を目標とし、ニュースポーツ、ダンス、健康づくり運動などオムニバス形式で「スポーツを楽しむ」ことを重視した１年生の講義科目である。「南中ソーラン」はこうした計画のもと、授業の後半である12、13回目に実施した。

調査時期は、４月のガイダンス（初回）、７月の南中ソーラン実施直後（12回目、13回目）、７月の最終授業日（15回目）である。調査対象者である履修学生には、事前に調査の主旨を説明し、承諾をとりながら実施した。調査項目は、それぞれ３－４項目から構成され、「南中ソーランとのイメージ」、「南中ソーランを踊ってみての感想」、「元南中生の踊りをどのように見たか」「南中ソーランを今後稚内市でどのようにすればよいか」などの質問項目から構成された質問紙を用いた。

１－１．ガイダンス時の「リアクションペーパー」の感想から

本節では、授業の初回ガイダンス（2015年４月８日）に実施した、授業のリアクションペーパーから寄せられた「南中ソーラン」に関する意見を下記に提示する。本授業におけるリアクションペーパーでは「南中ソーランについての思い出や経験」について記載を依頼した。なおリアクションペーパーの提出者は、１年女子が６名（全員稚内市内出身）、４年男子が１名（稚内市内出身）、１年男子が12名（市内６名、南中出身５名、市外２名）であった。市外出身者のうち１名は稚内市に隣接している豊富町出身であり、高校は稚内市内の高校に通学していた。そのため以降では「稚内市内・宗谷管内出身者」としてカウントする。もう１名は、稚内市から地理的に大きく離れた釧路市出身の学生であることから「稚内市外出身者」として以下の論考を進める。

稚内市内・宗谷管内出身者

・小学校６年くらいにやったはず。妹が幼稚園の年長ぐらいから小学校卒業までやっていたのを見ていた。練習しても踊りができてなくて、帰ってからも練習したり友達と確認したりしていた思い出や、最初のころは練習した次の日の筋肉痛に苛まれたりしたのも今ではいい思い出。

・小学校３，４年生の時に確かやった。４年生が３年生に教えるようなもの。覚えたソーランは運動会で披露した。その後、中学校１年ぐらいで、富士見の体育館に行き、ソーランを踊った。私は達成感を感じたので、楽しいという思い出が強い。

・中学校の体育の授業でソーラン、小学校の運動会で南中ソーランを簡単にしたものをやった。高校生の時、南　中ソーラン連が踊っているのを何回か見たことがある。

・南中ソーランは小学校（東小）の時に踊りました。運動会の時に全学年で踊りました。小学生の時はなんで自分たちが踊っているのに「南中」というのがメインなんだろう？と思ったのと、多

少「東」になってほしいと思いました。今では南中生のソーランを見たり、ソーラン連の踊りを見たりするとやっぱ東で踊ったソーランよりも全然うまくてカッコいいなと思っています。

・私は東小学校出身なのですが、小学校３年生の時に運動会で踊ったことがあるのを覚えています。振付などはもうほとんど忘れてしまいましたが、踊ってみて、楽しく、やりがいがあったのを覚えています。そのほかにも大谷高校には南中ソーラン連に所属している人が多かったし、高校最後の学校祭で地域のみなさんに披露してくれたのを見ていて力強くて、迫力があり、見るたびにスゴイなと尊敬しています。

・南中ソーランは保育所のころに初めて踊りました。思い出とかその時の気持ちなどは全く覚えていません。次に踊ったのは、小学校３，４年のとき。３年生の時は、その当時の４年生にソーランを教えてもらい４年生に上がると次は私たちが新しい３年生に教えるという伝統をつなぐというのがテーマの授業だったと思います。小学校の時は踊るのが楽しかった覚えがあります。最後に踊ったのは小学校の時ですが、今でも少しは覚えている・・・はずです。体がついていけるかどうか・・・

・昔、いとこが紅白歌合戦で南中に中継が入った時に踊っていた。

・南中出身ではないけれど、自分のいた学校に南中でソーランを教えていた人がいて、学校の生徒全員でソーランを習い、全国交流祭などで発表した。

・中学校の時に学校の行事で友達と南中ソーランを踊ったこと、全国交流祭で全校で南中ソーランをおどったこと

・小学校と中学校で少しだけやったことがある。それ以降は全くやったことがないので覚えてないです。最初から最後まで全力で力一杯やったらとても疲れますが、達成感もその時に来るのが好きなところです。稚内の代表的なイメージの１つでもあるので、これからもずっと伝統を引き継いでいってほしい。

・中学校の時に交流祭みたいなものでおどった

・小学の時、南中ソーランもどきをやったことがある。たくさん練習した。

・中学の時に学祭？のために皆で練習したことある。まぁまぁ楽しかった。高校の時に南中ソーランを本気でやっているガチ勢の人たちの踊りを見たときはとても感動した。

・彼女が南中ソーラン連に入っていて見にいっていましたが、泣く泣く別れました。南中ソーランは稚内ではもちろん、全国的にポピュラーなので、一度やってみたいです。

・確か、小学校４，５年の時にちょっとかじった程度でほぼ覚えていません。休み時間をつぶして振付をした苦い思い出が・・・。

稚内南中学校出身者

・中学の時に全国ソーラン祭に全校生徒で出場したのが思い出です。南中ソーランは好きなので、広い地域に広まってほしい。

・母校が南中なので、３年間踊りました。１年生の初日の次の日、腰痛と筋肉痛（に）なり、痛い思いでしかない。腰が痛くなるから踊りたくない、みているのは好き。

・僕がソーランを好きになったのは、南中が母校というのもあって踊ってる先輩がカッコよかったのと踊り自体がカッコよくて好きだったので、他のみんなよりうまくなりたいと思い始めました。

中学の時は袖ケ浦市の派遣交流で東京や群馬にいったり、全国交流祭や文化活動発表会などもあり広く様々な行事がありました。高校の時は、ソーラン連に所属し、稚内での行事、地域の行事が多くなりまたヨサコイソーラン祭りなど大きい行事にも参加しました。

・中学ではこれがひとつの楽しみでもありました。高校に入ってからも２年間、あるボランティア的な活動団体でかかわっていました。私の意見としてましては、南中ソーランは稚内の PR ポイントの１つであり、現在行われているソーラン関連のイベントはとても地域 PR に貢献できていて良いと思います。

・南中出身なので３年間毎年10回以上ソーランを踊っていた。中腰になるとき、膝が痛かったのを覚えている。高校の時に腰の骨を折ってから全くソーランを踊っていないから、踊るときに腰が痛くならないかが心配。

稚内市外出身者

・知らないので、これから上手くかかわっていきたい。

本授業における履修者は、稚内市内・宗谷管内出身者18名（稚内南中学校出身者５名含む）、稚内市外出身者１名であった。授業前におけるリアクションペーパーの結果から得られたのは３点である。第１に、多くの学生が「南中ソーラン」を小、中学校時代に「踊ったことがある」ものがとても多かった。第２に、踊った時の感想として「カッコいい」、「疲れた」、「達成感」、「楽しい」といった声が比較的多く寄せられた。第３に、市内出身は「何らかの機会（お祭り、イベント、南中ソーラン全国交流祭など）」で南中ソーランを「見る」機会も多く、「ソーラン連の踊り」、「南中の踊り」など市内の団体による演舞を見たことのあるものもいた。一方で、稚内から地理的に遠距離に位置する釧路市出身者の「稚内市外出身者」は、南中ソーランを「知らない」と回答している。

上記の授業ガイダンス時に実施したリアクションペーパーから、稚内市やその近郊出身の学生には、「何かしらの経験（実際に踊る、見る）」を有しており、彼・彼女らにとっては、南中ソーランが「身近なもの」という感覚が非常に強いものと推察される。

１－２．南中ソーラン授業終了後の「リアクションペーパー」から

本節では、授業で2015年７月１日、８日の２回実施した「南中ソーラン」のリアクションペーパー（７月８日に回収）から寄せられた学生の感想、意見を下記に提示する。なおリアクションペーパーの提出者は、１年女子が６名、４年男子が１名、１年男子が12名（稚内市内･宗谷管内６名、南中出身５名、市外１名、）であった。

本授業における講師は、「南中ソーラン連」副代表の藤澤翔太氏に講師を依頼して実施した。なお、彼の指導では下記「写真２」のように、稚内南中学校出身者が「お手本」となり、他の学生と対面する形式で指導を行った。初回の授業では、「歌詞１番（かまえ～ボックス移動（２））」を中心に、２回目の授業では「歌詞２番～歌詞３番」を中心に行い、授業の最後には南中ソーランを最初から最後まで踊る「通し演舞」を実施した。

写真２．授業風景（右側が南中出身者、左側が一般学生）

稚内市内、宗谷管内出身者

・自分は東のソーランを経験したことがあったので、それほど難しいとは感じなかったが、本物をやっている人たちとは明らかにレベルの差を感じた。特に四角形の動作をしているときに特にそれを感じた。東のソーランは難しいところだけ簡単にしたものだと感じて少し情けない気分になった。

・南中の本気度が高かった。生で見たのは初めて。しんどい、本家がしんどい。私は東小出身で、南中ソーランと７割ぐらいが一緒のソーランを知っていました。愚痴ですが、中途半端なものを覚えるから、本家がわからなくなるんですよー。ボックス移動？なにそれおいしいの？そんな感じでした。見るのは楽しい。南中の方々の本気の踊りは圧巻。すごかった。

・小学校で踊ったきりだったので、すごく懐かしい感じがしました。小学校のときと違い、全力で踊るとすごい疲れます。最後すべて通しで踊った時に、足がガクブルでした。

・踊って１週間は、筋肉痛で痛かった。太ももが辛かった。同じような体勢を保つのがキツかった。普段から踊ったら痩せそうだと思った。

・ソーランは１つ１つ真剣に踊っていたら、体中痛くなるし、つからったので、ソーラン連は心底カッコいいと感じた。２回とも本当に疲れたが、達成感のある踊りだなと強く思った。気持ちが良かった。

・本家南中ソーランと東中のソーランと比べてみると、本家の方が圧倒的にカッコよかったが、とても踊るのが大変だった。

・ソーランは、踊ったことがあるので簡単だと思っていましたが、実際のソーランと東小で踊っていたソーランは全然違いました。東小ソーランには、ボックス移動がなかったので、すごくボックス移動には苦戦しました。２回目の南中ソーランでした。一応、全部教えてもらったが、ボックス移動や姿勢を低くするなど難しいところがたくさんありました。最後にグループに分かれて見せ合いをしたときは恥ずかしいので完璧には覚えていなかったので、うまく踊れませんでした。

・やっぱり、ソーラン連のソーランは迫力がありました。ソーラン連のソーランを見るときがありますが、見入ってしまい。あっという間に終わってしまいます。ソーランは何回みても飽きないです。

・まずは、腰が痛い。見るのとやるのではこうも違うのかと思い知らされた。しかしやってみると楽しいものである。１つ１つの動きに名前があり、細かいところまで気を付けないと下手に見えてしまったり、止めるとこもちゃんと止めないとカッコ悪く見えたりするため、かなり真剣に取り組む必要がある。私の中ではこれが一番楽しかった。最後まで通したとき、足が死んだ。約３分全力でおどったので、ここまで動けなくなるとは思わなかった。ソーラン連に所属している人たちを改めてすごいと思った。きつい練習だったが、良い経験になった。

・私は南中出身ではないけれど、小中学校にもともと南中ソーランを教えていた人がいたので、小１～中３まで毎年ソーランを踊っていました。ソーランは、昔から踊るのも見るのも好きなので、前ほどキチンと踊れるわけではないけれど、最初から最後まで楽しみながらスポーツの授業を受けることができて良かったと思います。私は前回の南中ソーランで大体は思い出したので、今回は細かいところの確認をしながら踊っていました。今は昔ほど体を動かしていないので、低い体勢をするのが、うまくいかなかったり、反応が遅いときがあったけれど、最後の１回はミスなく全力で踊りきれたので良かったです。

・南中ソーランは今まで見る専門だったけど、いざ自分がやってみるとキツくてしんどかったです。南中生すごいと実感しました。

・すべての振付が終了し、通しで踊ってみると膝と腰にきて正直辛かったです。でもあのカッコいい南中ソーランを踊れてよかったです。

稚内南中学校出身者

・私は南中出身なので基本の動きは覚えていたが、1，2番の歌詞のところが違ったため覚えるのが大変だった。

・南中卒なんで、踊り飽きていたので見るのみが大好きだった。後自分の体力が落ちていることにショックを受けました。今回は南中ソーラン２回目、足腰痛くて死にそうになった。けど、ものすごく懐かしく思えた。

・この日は、稚内南中の郷土芸能、南中ソーランをやりました。私は南中ソーラン連に所属していたので、前に出て手本をしてました。みんなの上達速度が早くて驚きました。最後まで教えることができました。みんなで見せ合いもできて楽しかったです

・南中ソーランは中学校の時にやって以来だったので、いきなり前に出て踊れるかどうか心配でしたが、身体が覚えていて、音楽を聴いたら自然と思いだしたので覚えていて良かったです。前の週に続きソーランで、前に出て踊るのが少し緊張しました。体力もなくなっているので、すぐに息が上がって大変でした。

・私は南中生だが、割と振り付けを忘れていた。中学の時はそんなに感じなかったが、まだ途中までしかやっていないけど、すごい汗もかいたし、疲れた。みんな曲に合わせて踊る回数が少なかったので、曲を使って教えてくれたらよかった。

・数年ぶりに踊った南中ソーランは、足腰が弱い自分にとってつらかった。全体の流れも覚えていなく、衰えは恐ろしいと身を持って感じた。久しぶりに南中ソーランを一曲通して踊った。自分の想像以上に息切れをしておらず、体力が向上したのだろうと思っている。おそらくもう踊ることはないはずだが、踊りの動きなどは忘れないようにしたい。

「南中ソーラン」終了時のリアクションペーパーから、下記の３点について付言しておきたい。

第１に、「キツかった」、「つらかった」などの身体的疲労を訴えるものが多く、中には一週間筋肉痛に悩まされた学生もいた。このような意見は、稚内南中学校出身者からも寄せられ、「南中ソーラン」の運動量の多さ、辛さが推察される。

第２に、稚内市内･宗谷管内出身者がいう「本家」という表現である。稚内市では各学校単独で「南中ソーラン」にアレンジを加えた「各学校オリジナルのソーラン」を製作している学校もある。そのようにして作られたソーランは、「〇〇ソーラン」という各学校オリジナルなものである。こうしたソーランを体験してきた学生たちは、自分たちとは異なる稚内南中学校の「南中ソーラン」や「南中ソーラン連」に対して「本家」という表現を使用しているものと推察される。さらに「本家」が踊る「南中ソーラン」を体験したことで、「カッコいい」、稚内南中学校出身者に対して「すごい」など意識の変化の兆しも見られた。

第３に、稚内南中学校出身者の感想は、数年ぶりに踊ったものが多いのにも関わらず「体が覚えていた」というものが多かった。また同級生に対する指導に関しても、「緊張した」という声や「みんなの上達速度が早くて驚いた」という感想が寄せられた。

１－３.「スポーツⅠ」授業終了後のアンケート調査から

本節では、授業で2015年７月22日に実施した「南中ソーラン」に関するアンケート調査結果を下記に提示する。質問紙は４項目から構成され、筆者が独自に考案した質問項目を使用した。アンケートは授業時間の１部を利用して実施し、履修学生全員から回答を得られた。

①「南中ソーランを踊ってみた感想」

稚内市内・宗谷管内出身者

・学校の時に潮小ソーランを踊って以来だったので、体力の無さがわかった。歳をとったんだなと思った

・見ているだけならそんなに難しいことはしてないと思ったけど、実際に踊ってみるとすごく難しく、思うような動きができなかった

・小学校のころに「東中ソーラン」という形で踊ったことがあったが、ボックス移動とか本格的な南中ソーランを踊ってみて、たった３分半くらいの踊りなのにとても体力がいるなどと感じました

・東の学校の中途半端な振り付けを覚えている身体で本家の振付をしると、今まで踊っていたソーランが駆る合ったという印象を感じた。体を大きく動かし、全力で踊るので、とてもしんどかった

・小学校の時に変形してるソーランをやりました。本物を踊る前は、ほとんど一緒だからできる！と思っていましたが、実際踊ってみると小学校の時に踊ったソーランがすごく簡単でした。

・中学校までは踊ってもそんなに疲れなかったのに大人になってから踊るととてもつらい。体全体を使って踊ることを大人になって初めて知った

・踊り自体は何度も見たことはあったが、思った以上に中腰の姿勢がつらいので、若い世代にしか

踊りに向かないように感じた。

・東でアレンジされたものを踊っていたので南中ソーランを踊ってみて、その細かさがわかった。すべての所で東にはなかったコツのようなものがあって何となくではできなかった。それに東では簡単になっている部分が難しかった。難しいので東よりも楽しめて踊れると思った。

・南中ソーランは練習や踊っている途中は体がいたくなりつらいときが多いが、全体との一体感がとても感じることができ、終わってみると達成感があり、また今度踊ってみたいと思った。

・小学校の時に踊った時より体思うように動かず、歳を取ったなと感じた。しかし、中々カッコいい踊りなので楽しく踊れた

・正直今は体力がなくて全部踊るのはきつい。ですけど、いつ踊ってみても楽しく踊れてみんなで踊ると一体感みたいなものがあって面白かったです。

・小学校、中学校では変形したものしか踊ったことがなかったので、本家の南中ソーランの方がカッコいいと思った。

・真剣に取り組むと体の疲労がとても強く、あれをいつも全力で踊っているソーラン連の方々は本当にカッコいいと感じた

・小学校の時は本気で踊っていなかったのか２回連続で踊れと言われれば踊りましたが、今２回連続で踊れといわれた嫌です。と答えるぐらいにつらかったです

・キャッチーなメロディと単純な動きが覚えやすく、数年たった今でも覚えている

稚内南中学校出身者

・３年ぶりに踊って全然動きも覚えておらず、普段しないような動きもしたから３年前に踊ったときよりも息切れがした。運動会で南中ソーランを踊るためにたくさん練習させられたから踊るときのコツだけは覚えていた。

・中学校の時に全校で踊っていて、みんなでできたのですごくやりがいはあった気がした。大学になってもう一度踊った時には、振り付けも多少忘れていたが、スポーツの授業で一番の汗をかけたのでやはりソーランは偉大だと感じた。

・中学、高校からずっと思っていることは、入りだしの音と構えからの波がかっこいいです。１つ１つの動きに切れと止めと緩急があるので、そこを上手になると全部よく見えます。

・小学校の時はカッコいい踊りだから一緒に踊りたいと思っていた。中学生になってからすべてで通して腰が痛いから踊りたくなかったと思ったときもあったけど、人に見てもらうと何か嬉しくて楽しかった

稚内市外出身者

・動きが激しい分とても疲れたが、不完全ながらも踊れると疲れているということもあって達成感が大きかった。南中ソーランは動きが激しいので、周りから見ると迫力があると思う

②「指導役となった「南中出身者」をみて（南中出身者は「お手本」となって）の感想」

稚内市内・宗谷管内出身者

・３年くらい踊っていなかったはずなのに踊れていてすごいなと思った。体に染みついているんだなと思った。

さすがだなと思った。中学校にしたこと覚えていて、カッコよく踊れていたなと。

・とても体力が必要で低姿勢をキープしなきゃいけないのに簡単に見えるくらい、いつもしなやかに踊ってて尊敬しました

・中途半端なソーランしか知らなかったので、見る前はあまり期待していなかったけど、見て純粋に感動した。あそこまで自分の体を思い通りに動かせて踊れれば楽しいだろうなと思った

・こんなカッコいい踊りを踊れる事に尊敬しました。１回、２回の練習では南中ＯＢみたいに上手に踊ることはできないと思いました。

・キレがある人とない人の差が激しかった。中学時代に好きだったか、嫌いだったかで変わるのか？と思った。

・何年も前に覚えた踊りを踊ることができたのを見て、他のＯＢと集まって大人数で集まって踊ることも可能であるように感じる

・南中ソーランに関わっている時間が他と比べて多いので、構えの段階から他とは違うと思った。とても上手だった。

・面倒な顔してやっている人が大体上手で少し笑えた

・やっぱり本家を見ると迫力が違う。姿勢の低さやキレも圧倒的に違った

・ほとんどの人が久々だった感じもしたが、それでも体に染みついているようですごかった。何度も何度も練習してきた証だと思った

・南中に入学したら必ず踊れるものなのかと感心しました。また久々に踊るはずなのにしっかりと踊れていたので、体に染みついているなと感じました

稚内南中学校出身者

・中学校で南中ソーランを真面目に踊ってなかった自分が見本となれるか、見本にしてもらってもよいのかな？と思った

・南中出身だったので、見本となる側でしたが正直あまり覚えていない部分もあったのでつらかった

・中学校の時は教えられる側で初めて教える側になって人に教えるのが難しかったのと大変でした。でも誰かに教えて、その人と南中ソーランを踊るのは楽しいと思えました。

・高校は豊富に言っていたので、南中ソーランを久々にできたのがうれしかったけど、中学生の時みたいに踊れないなとも思った

稚内市外出身者

・何年も踊っていない人がほとんどだったが、いざ始まると皆しっかりと踊れていた。何年もやっていなくてもおぼえているということは、当時はそれだけ真剣に踊りを練習していたのだと思う

③「南中ソーランを今後稚内市でどのようにしていったら良いか」

稚内市内・宗谷管内出身者

・ソーランに関するイベントを稚内でも取り入れたらいいと思った

・踊り方を広めて、もっと多くの人に知ってもらう

・たくさんの人に南中ソーランを知っていただき、多くの方にも踊りを教える場を開いたりするの

もいいのではないかと思います

・もっと有名にするべきだと思う。７－８，９月に行われるお祭りなどに積極的に参加して、南中ソーランを稚内に知らしめるべき

・もっと稚内で有名になってほしいと思いました。稚内といえば「ソーラン」と思われるようになってほしいです。

・ソーランが内地や世界でとても知られていることを稚内の人がもっと知ることができたらいい

・事実とは違うが、映画や書籍などで取り上げられ、南中ソーランは有名になったので、観光客などにも押していくべきだと思う。しかし真実を知らないままでは意味がないので全国に本当のことも広めていくべきだと思う

・他の学校でも変なアレンジをせずに、南中ソーランというものをみんなで踊って残していくべき

・どの中学でも踊らせれば、南中生以外の人でも覚えている人が増えるので稚内の小中で踊りを組み込めばいい

・これをしっかりと受け継いで、これからも伝統にするべき

・各イベントで積極的に参加していくべき。見ていて感動を与えてくれるので、街のいろいろな場面で踊ってほしい。

・全国でも南中ソーランは有名なのですが、全国の人は南中ソーランが稚内で生まれたと分かっているのでしょうか？やはり南中ソーランの生まれた経緯を紹介したらいいんじゃないですかね。

・もし伝統にできるのであれば、伝統にすると稚内の伝統芸能として各地で重宝されると感じる

稚内南中学校出身者

・どんどん稚内の売りにするべきです

・南中ソーランは稚内発祥なので今後もずっと受け継がれていくべきだと思う。それに伴って南中ソーランで稚内は活性化すれば良いと思う。

・南中ソーランとは言っているが、稚内の他の学校の人も踊っていいと思う。聞くところによると南中ソーランをまねたような踊りがあると知ったので稚内は南中ソーランで統一すべき。そして南中ソーランをみんなで踊るようなイベントや知らない人にも教えてあげて、地域の人も巻き込むイベントをすると楽しいと思う

・これからも今までのように小中高で南中ソーランを教えていき、何年先も踊られ続けていけるような踊りにしていけばいいと思います。

・稚内の伝統芸能に

稚内市外出身者

・様々な世代で集まり、イベントなどで100－200人などの大規模で踊るのも面白いように感じた

④「その他（自由記述式）」

稚内市内・宗谷管内出身者

・南中以外の学校も本家の南中ソーランを教えればいいと思った

・稚内市内の小、中学校でもソーランは踊るが、南中ソーランから派生した踊りなのかどうかが気になった

・稚内全体で踊ってもっと残っていけばいいと思った。細かくてカッコいいのでアレンジされたものよりも覚えたいという気持ちが強くなると思った。
・とても上手な人が踊ると本当に激しくカッコいい踊りに見えるので、今後も広めていってほしいと思った
・なぜ、東中や稚中などで、本家と変形させたものを踊ったのかが気になった
・昔から続いている伝統なので、これからもずっと続いてもっと有名になってほしい

稚内南中学校出身者

・みんなも連に入って踊ればいいのになと思いました。
・今の南中の評判はあまりよくなく、南中生が踊っても何か心がこもってないように感じているからもったいないと思う。せっかく世界で１つの南中ソーラン発祥の中学校だから南中生は自覚をしてほしいと思う

稚内市外出身者

・南中ソーランは主にどういった場で披露されているのかが気になる

以上、授業終了後に実施した「南中ソーラン」のアンケート調査について、下記の４点について付言しておきたい。

第１に、「南中ソーランを踊ってみての感想」においても、「キツかった」、「つらかった」などの身体的疲労を訴えるものが多かった。このような意見は、「南中出身者」からも寄せられており、改めて「南中ソーラン」の運動量の多さが推察される。同時に一体感、達成感といった踊りを通じて得た体験に関する言及もみられた。

第２に、「南中出身者」と対面で踊る授業形態を通して、南中出身者とそれ以外の学生が相互に学びを共有する場面が見られた。「こんなカッコいい踊りを踊れる事に尊敬しました」、「南中に入学したら必ず踊れるものなのかと感心しました。また久々に踊るはずなのにしっかりと踊れていたので、体に染みついているなと感じました」という南中出身者を称える記述が見られた。一方、南中出身者においては、初めて南中ソーランの見本となったこともあり戸惑いを見せた学生も少なくなかった。ただ、「誰かに教えて、その人と南中ソーランを踊るのは楽しいと思えました」という記述も見られた。

第３に、「南中ソーランを今後稚内市でどのようにしていったら良いか」という問いに対しては、「南中ソーランをもっと有名にしていくべき」という普及に力を入れるべきという声が多く寄せられた。その一方で、「踊り」の多様化について、「南中ソーランで統一すべき」という記述も見られた。こうした記述からは、南中出身者以外においても「南中ソーラン」が地域文化・郷土芸能として認識されつつあることを示している可能性があるといえるだろう。

第４に、「その他」においても、「本家」や「他校で実施されているソーラン」といった言及が見られ、「南中ソーラン」と「他校オリジナルのソーラン」が学生たちの中で不明瞭なものとなっていることが推察された。

２．現職教員と「南中ソーラン連」へのインタビュー調査の結果

本章では、現職教員へのインタビュー調査の結果、ならびに「南中ソーラン連総会」における参与

観察、「南中ソーラン連」メンバーのインタビュー調査の結果を下記に提示する。

調査は、2015年７月～12月に実施した。調査者の選定に当たっては、「南中ソーラン連」、稚内北星学園大学の教員から紹介いただき、高校生３名（女性２名）、学生２名、社会人１名、中学校教員２名、計８名への調査を実施した（表１）。調査対象者には、事前に調査の主旨を説明し、ボイスレコーダーによる録音の承諾をとりながら実施した。インタビューアーは筆者らが行った。調査は、一人当たり45分程度を目安とし、７つの質問を中心に「半構造化インタビュー」を行った。調査項目は、①「南中ソーラン」との出会い、②「南中ソーラン（南中ソーラン連）」の現状、③これからの「南中ソーラン（南中ソーラン連）」などについてである。また、2015年８月２日に開催された「南中ソーラン連総会」の参与観察を行い、音声データを録音した。本稿では得られた音声データの「テープおこし」を行い、そのトランスクリプトをもとに、質的記述的分析をおこなった。分析にあたっては、なお「語り」の引用に際しては、そのまま引用しているが、方言や「若者言葉」、前後関係が不明瞭な点に関しては、一部筆者らによる注釈を加えている。

表１　調査対象者と属性

	性別	年齢	職業	特記事項
Ａ先生	男性	非公表	教員	稚内市立稚内南中学校
Ｂ先生	男性	非公表	教員	保健体育科
Ｃさん	男性	２０代	社会人	南中ソーラン連　役員
Ｄさん	男性	２０代	学生	南中ソーラン連　役員
Ｅさん	男性	１０代	学生	南中ソーラン連
Ｆさん	男性	１０代	高校生	南中ソーラン連
Ｇさん	女性	１０代	高校生	南中ソーラン連
Ｈさん	女性	１０代	高校生	南中ソーラン連（外国籍）

※「南中ソーラン連」顧問：Ｚ先生、Ｙ先生、Ｘ先生（参与観察、インタビューの中で登場）

２－１．現場の教員へのインタビュー調査から

本節における現職教員へのインタビュー調査は、稚内市立稚内南中学校教員（Ａ先生）、ならびに稚内市内中学校に勤務経験のある保健体育科教員（Ｂ先生）への半構造化インタビューを実施した。両教員とも「南中ソーラン」の指導経験を有している。インタビュー調査を通して、下記４点の現状と課題が提示された。

１）「南中ソーラン」を現場で教えることの難しさ

「南中ソーラン」の創設期、発展期における学校現場では、これまで「南中ソーランのすべて」を指導できる教員が少なからず存在していた。このような教員は保健体育科教員に限らず、他の教科の教員が担うことも多かったとされる。しかしながら、そうした教員が人事異動や退職によって少なくなり、今日の稚内市内の教育現場では、保健体育科教員が「保健体育（ダンス領域）」や「総合的な学習の時間」で「南中ソーラン」を指導することが多くなってきたとされる。こうした今日的な現状に直面している２人の教員の語りを以下に提示する。

まったくソーランに携わったことがなかったから、何を教えたらいいのかというところから始まって、技術指導は難しかったんです。だから自分ができなかったから、何をどうしていいのかっていう、その材料もないし、結果的に南中ソーランを教えている先生っていうのも（…中略…）実際その全部（南中ソーランの全部）を伝えられる先生がだんだん異動で少なくなって、もう３人いたかいないかだったんですよね。だからその先生に聞きながらとか、あとは実際にその先生が教えてもらうようにお願いして、時間あけてもらってっていうのが現実的なところでした（A先生）

現場の在り方というか、ボチボチ過渡期に来ていると思うんですよ。まるで文化も知らない体育教員がいきなりポーンと転勤して、「お前体育だから、南中ソーラン頼むねー」といって任されるのは、ちょっと違うかなーって思いますし、続けていくためのシステムづくりっていうのを「街ぐるみ」で考えていかないといけないし、現場の先生はやっぱりかなりの負担を強いられているって感じがしますね。話を聞くと、A中なんかは、バリバリやってた○○先生が赴任されて、そういう先生が来たら「ラッキー」ですよね。でもいなかったらどうなる？のか、ってことですよね。やれないってことはないでしょうけど、まったく南中ソーランがわかんないような体育の先生が来て、その人に丸投げされている状況って言ったら悲惨ですよね。（B先生）

上記の語りから、２名の教員とも自身の置かれていた境遇、そこでの苦労が読み取れる。他の実技科目などのように「指導書」のようなものが確立されていない「南中ソーラン」の指導では、踊りを媒介とした伝承によって今日まで受け継がれてきた。稚内市で育った生徒たちは、こうした系譜の中に位置しているものも多いが、教員の多くは大卒で稚内に初めて赴任したものも少なくない。現場の教員たちが、「何を教えたらいいのか」、「丸投げ」されている感情を持ってしまわないような「南中ソーラン指導」のためのシステム、体制づくりが早急に望まれると言えよう。

２）南中ソーラン指導に見られた工夫

前項で確認したように、「南中ソーラン」の指導は、現場の教員にとっては容易いものではない。ここでは、「踊り」の指導する教員、学校全体による工夫の様子を提示する。

去年あたりから体育の中で、ダンスの領域で「南中ソーラン」を練習する時間、それは行事にむけて、練習をダンスの中でやろうってことで、そのあたりから「縦割りの活動」でソーランを教えようっていうのが、ちょっと増えてきていて、それは結局その教えている人もだんだん少なくなってくるし、その伝えられる人が、先輩が学校の中のリーダーになる３年生が中心となって後輩に教えながら、やる仕組みを作っていかないかーって先を見据えて、今、去年からは郷土芸能委員ってのがうちの常任委員会にあるんだけども、そのリーダーが中心となって、実際に体育の時間の中で後輩たちを指導して、こっちの教師側はその段取りを付けたりだとか、どんな風に進めていこうだとか、そういう下準備が必要なんだけど、や

りながら後輩たちにソーランを伝えていくっていう取り組みをしています（A先生）。

授業でもそうだし、有志達もそうですけど、最初は全体でこうやってやります、グループでやります。グループの中でも個別にやりますとかいろんな形態ではやってましたけど、一斉（指導）だけで完結するってことはありえないかなって気はしますね。（筆者：中学生でグループによる相互チェックはうまく回りますか？）こちらが視点を指定してあげるわけですよ。構えの姿勢をやるから、指が開いているとか手首が沿っているとか、そういうところを見てやろうねとか、その点を指導してあげれば（B先生）

さらにA先生は、ダンス、踊りとして求める「レベルの違い」に応じて、指導方法、指導方針についても語ってくれた。

（南中ソーランは稚内南中学校）全体でやるものだから。そういうのもあるけど、みんなで同じこと同じ時間共有してやるっていう、そこはわりきって、そうやって、すべて完璧を求めるのがこの学校（稚内南中学校）では「有志ソーラン」だし、卒業したら「（南中）ソーラン連」の演舞だし、そういうとこなんだと思うな。いろんな発達段階がある中で、一緒のことをやるってことに意義を持たせるのが、大事なんじゃないかな（A先生）。

これまでの語りでも見られるとおり、「南中ソーラン」の指導は容易いものではない。その中でも稚内南中学校では、「縦割り班」、B先生の学校では「班学習」など生徒同士による相互指導を通じた伝承への工夫がなされていた。このような背景の１つとしては、稚内市立の各小学校では、小学校時代から「南中ソーラン」に親しんでおり、このような班別学習が可能な土壌が構築されていることが要因と考えらえる。その一方で、「南中ソーラン」に求めるもののとして「同じ時間共有してやる」ことに価値を見出し、踊りを極めるベクトルは「有志ソーラン」や「南中ソーラン連」であるとの明確に線引きをしている様子もうかがえた。

３）南中ソーランの身体活動量、身体負荷の大きさへの懸念

「南中ソーラン」については、伝統芸能の１つとしてそのエネルギッシュな演舞には多くの観客から称賛の拍手は絶えない。しかしながら、その一方で「南中ソーラン」の運動量、運動負荷の大きさについては、現場の教員、体育の専門家として看過できない部分もあるという。

（南中ソーランを）一発踊ったらもうへとへとですよね。息上がりますよね。ものすごいと思います、運動量は、ハードである。膝痛い子とかは無理させないですね。（A先生）

僕は、「体に悪い運動だから」といいながら練習してましたね、あれだけ膝を曲げながら、やるのは今のスポーツ科学ではないですね。極端な話「ウサギ跳び」をやらせているようなもんですよね。でも、そこと付き合っていかなければならないですし、体育授業でもその有

志の練習でも、休み時間とかは多めにとっていましたし、そういう配慮は絶対必要ですよね。一回やったら酸欠ですよね。ましてやアンコールなんてあるじゃないですか（笑）、地獄ですよね。（B先生）

このように体育の専門家であるB先生がいうように「今のスポーツ科学ではない」、「ウサギ跳びをやらせているようなもん」という語りからも見られるように、「南中ソーラン」の運動量や運動負荷の大きさについては、看過できない部分もある。しかしながら、伝統芸能の１つと考えるならば、B先生がいうように「そこと付き合っていかなければならない」部分も出てくる。

今後は、こうした運動負荷の大きな「南中ソーラン」とどのように向き合っていくべきか考える必要があるであろう。具体的には、運動量、運動負荷などの運動生理学的な実験による科学的な検討や、「南中ソーラン」を一曲通して踊るための「体力づくり」なども必要となるであろう。「踊り」と「体力づくり」の関連ついて、侘美靖、森谷絜（2005）による「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り参加による運動量増加と体力の向上」では、練習を通じて（ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り）本番へ向けた体力づくりの重要性が指摘なされている。

４）南中ソーランの今後の可能性

ここでは、現場の教員たちが「南中ソーラン」の今後について語ってもらった。下記にその語りを引用する。

稚内の１つの文化だと思うんですよ、少なからず。南中ソーランっていうことでそれをやらされていると感じる先生ももちろんいるんですけど、僕なんかは、あれは「稚内のもの」なんだなって思いました。最初僕も、多少あったんですよ。「南中ソーラン」なのに、なんでわざわざA中でやるんだろうな、新しいものやるんだったら作ればいいのにっていう議論もあったんですよ。当時、お金的な部分、時間的な面もあったりハードな部分が中々そろわなくて、やれなかったんですけど。あれをやることによって、稚内市民、稚内の子供たちが「稚内っていったら何か」ってあげられる1つの文化なんじゃないのかなって思います（B先生）。

文化自体はすごくいいものだから、大人になってもみんなが踊れなくても、続けていってほしいし、自分が学生時代踊っていてもいいんだけど、「南中ソーラン踊ってたんだよ」っていうか、「自分も誇れる郷土芸能できるんだよ」っていうのを持っていてほしいなって、自分の中に。ただ「南中ソーラン」が広まればいいやとかではなくて、全国どこでも「南中ソーラン」踊れるようになったら良いとかではなくて、そういうは自然に今踊られて、評価されて・・・無理強いしなくても自分たちがやってきたことを自分の中で誇りにできれば、どんな形でもいいかなと（A先生）。

どちらの教員からも「稚内の文化の１つ」として大切なものであり、これを引き継いでいくことに関しては、肯定的な意見が聞かれた。他校の立場からみる「南中ソーラン」という名称についても、

当初の違和感は表明されているものの、実際の指導経験を通して次第に地域文化・郷土芸能として受容していったものと考えられる（B先生）。ただ、「南中ソーラン全国交流祭」の実施方法、実施時期など現場では、少なからず不満もある（A先生「なんでこの毎年、すっごい忙しいのあの時期って実は。運動会の前日とかだから。交流祭。それを強制参加とかね。南中出るにきまってるんでしょって。」「なんか先に走られてるなー現場振り回されてるなーっていうのはいろんな先生も言ってるかな。」）。今後「南中ソーラン」を伝統芸能や文化の１つとして定着させ、未来へと受け継いでいくためには、学校現場と行政がどのように折り合いを付けていくのかが重要となるであろう。

２－２.「南中ソーラン連」総会の参与観察

本節では、2015年８月２日に実施された「南中ソーラン連総会」の参与観察の結果を記載する。

ここで付記しておきたい点として、「南中ソーラン連の総会」は、過去に結成当初の2010年に１度行われただけであり、今回が２度目の開催となった。総会では、まず初めに役員の挨拶が行われ、以下では「南中ソーラン連」の役員であるＤくんの言葉を引用したい。

> 高校生、新しく入ってくる子たちがちゃんとソーラン好きのまま、ここを出たり、あとからでもまた帰ってこれる（来られる）ような「居場所のような存在」であり続けたいと思っています。

「南中ソーラン連」は、基本的に高校生を中心とした団体である。そのため高校３年間在籍し、その後は札幌の学校や就職するものも少なくない。そのため人の出入りの多い団体であるが、現在中心となっている20代前半のＤくんの中にも南中ソーランが好きな仲間のための「居場所のような存在」として位置付けていこうという意思が読み取れる。一方、役員挨拶において「手探りで動いているような部分」、「今までのソーラン連でこういう総会という形であまりなかなかなかったので」といった言及が他の役員から見られるように、「南中ソーラン連」という組織は、まだ未成熟であることも推察される。

１）南中ソーラン連メンバーの自己紹介から

総会の終盤には、Ｚ先生の「冥土の土産に」という冗談から、参加者、関係者による自己紹介がなされた。全体的に簡潔な自己紹介をするものも多かったが、特筆すべきものとして、下記に３名の今後の抱負を提示する。

> 自分も結成当初からのメンバーで今までお世話になり、今は働きながらやっているので、若い子たちに負けないようにソーランやっていきたいとおもっております（Ｃくん）。

> 来年からは、僕の希望なんですけど稚内に帰ってきて、ソーランとかの活動に参加したいと思っています。踊り手としてだけじゃなくて、せっかくリハビリの学校に通っているので、患部のケアとかにもかかわっていけたらと思っています。（22歳、男）

自分も今年でソーラン連は２年半になります。部活もあってなかなか連の練習の時間が取れないのですが、自分も３年生なので中心人物なので時間を見つけて精一杯ソーラン文化を伝達させていきたいなと思います（18歳、男）

ここで注目したいのは、南中ソーラン連に所属しているメンバーの多様性である。高校生以外にも社会人、学生、札幌の専門学校に通っている学生など高校生以外の構成員が数名含まれていた。さらに稚内へのＵターン就職を志向するなど、「南中ソーラン」が１つのメディアとして、若者たちの就職、稚内の定住に向けて機能していることが推察される。また、踊りの中心である高校生の中から、「ソーラン文化を伝達させていきたい」という発言も見られ、今後の「文化の伝道者」としての気概が伺えた。

２）南中ソーラン連を支えるおとな（教員）からの期待

総会では、役員たちが「首脳陣」と呼ぶＹ先生とＸ先生から、「南中ソーラン連」の意義、ソーラン連への期待が述べられた。

「連」ってつながることだから、そういう「つながって、連らなっていく」っていうことを大事にしてくれたらいいなーって思って連を作って、今日こうやってね、戻ってくる人、後輩を支えたいって人も含めて、連なってきているなー、そう意味ではとってもいい集まりになっていくんだろうなーという風に期待しています。（Ｙ先生）

ぜひソーランを皆さんの手でもっともっと広めてほしいし、皆さん自身もこのソーランを通じて人間として大きく成長してほしいという風に思います。私はいろんなところでソーランの話をするときに、南中ソーランはあえて南中といいます。南中ソーランは日本人の心、若者の心なんです。ぜひそういう思いで踊ってほしいんです。これからも頑張ってください、応援しています。（Ｘ先生）

「南中ソーラン連」は、組織として未成熟な団体ではあるものの、学校現場、社会教育の現場に精通した「おとな（教員）」によるサポートは今後も必要不可欠なものであると推察される。現在、「南中ソーラン連」の事務局は、Ｚ先生の研究室に置かれるなど、地域の「おとな」による継続的な支援がなされている。

２－３.「南中ソーラン連」のメンバーへのインタビュー調査

「南中ソーラン連」へのインタビュー調査は、社会人１名（Ｃくん）、学生２名（Ｄくん、Ｅくん）、高校生３名（Ｆくん、Ｇさん、Ｈさん）へ実施した。高校生の３名は、いずれも2015年の10月にミラノ万博へ参加し、現地における演舞を経験している。調査は２つ実施した。１つは「南中ソーラン連」役員であるＤくんには、予備調査的な意味合いも含めた「非構造化インタビュー」を行い、課題や疑問点の

整理を行った。もう１つは、Ｃくん、Ｅくん～Ｈさんの５名に「半構造化インタビュー」による調査を実施し、「南中ソーラン」と出会ったきっかけ、「南中ソーラン」への思い、今後の「南中ソーラン」や「南中ソーラン連」への考えを質問した。

２－３－１．Ｄくんへの予備調査から

本項で調査対象者としたＤくんは、小学校の時に「南中ソーラン」に出会い、その後稚内市立稚内南中学校「郷土芸能委員会」の委員長を務め、現在は「南中ソーラン連」の「役員」として、高校生や地域の児童・生徒、社会人に演舞指導をする指導者的役割を担っている。Ｄくんへの調査では、７点の調査結果が得られた。下記にまとめて提示する。

①「南中ソーラン連」ができたきっかけについて

高校２年の時にその時の（稚内南中学校の）校長がＺ先生ですね、Ｚ先生に南中に呼び出されて、「中国に行けるって言ったら行くか？」っていわれて、「行きたいです！」っていった時に集められたのが、歴代の座長（郷土芸能委員会委員長）だったんですよね、そん時の１個上の高校３年生の座長はちょっと無理ですねーっていって、高１の時の座長が呼び出せなくて、「１番ソーランに熱い学年って言ったら、恵まれてるお前らの学年じゃないか」っていわれて、そこから僕が呼ばれなかったらソーラン連もできていないですね。

②時代とともに変化し続ける踊り

（南中ソーラン連）前会長世代は、振付師さんの春日壽升さんと島田十夢さんの先生の踊りが色濃く残ってる、どっちかっていうと漁に近いんですよ。ニシン漁にすごいより近くて、現会長世代になると漁の部分がなくなっちゃって、踊りに合わせてYOSAKOIもぐっと上がってきた時期なんで、もっとロックな。僕らの世代になってくると低さが志向になってくるんですよ。低さが志向とか、メリハリの部分、漁っていう意識よりは踊りの方に重きがいくって感じが僕の印象ですね。

③踊りが変化する理由

世代で大きく（踊りが）変わってくるのは、「感覚的に動きをわかろうとしない」んですよね。「パッと見て、足とか手とかそれどうやってやってるんだろう」っていうのをどうやるのか聞いてくるんですよね。僕らは見て「こうじゃない？」とかっていう試行錯誤があったんですけど、今の小・中・高校生も、今の（南中ソーラン）連の子たちもどうやるのかを聞いてくるんですよね。今まで言葉で説明したことがなったんだけど、こういう動きなんだけどこうやるんだっていう教え方をずっと繰り返しているんで、思えばそれが踊りの変化のきっかけだと思います。

④何をもって「南中ソーラン」と呼ぶのか？

（「南中ソーラン」という明確な形は）ないです。ソーラン連は今のところ・・・。「ソーラン連と

しての踊り」と「全国１位（1993年「全国民謡民舞大賞」受賞）を取った時の踊り」と２つのパターンを踊れるようにしようっていうのを基本方針にしてまして、今首脳陣って呼んでるＹ先生とかＺ先生とかその辺の世代の人たちは、頭の中で南中ソーラン＝全国１位を取った時なんですよね。（…中略…）「南中ソーランの踊り、これって決まったものを作りあげると飽きるだろうから、いろんな種類踊れるようになったり、同じ音だけど全く違う動きしてもいいんじゃないの」みたいな、そういうことを言ってくるんですよね。そこで生まれる問題として、３年しかないんですよ。１年生で入ったとして、３種類とか４種類教えなきゃいけなくなるとすごい大変なんですよ。

⑤南中ソーランの「プロ」としての自覚

「プロ」っていう言葉を説明するなら、「全国１位」を取った時の息がかかっているソーランを受け継いでいるからこそ「プロ」だと思っています。元祖、本家っていわれると元祖は「全国１位」の時だと思ってます。僕は、本家は、勝手に南中がやってくれればいいと思っています。すごくここドンドン難しくなっていくんですけど、僕自身も、元祖を踊っているのは今僕らしかいないです。本家って呼ぶのは毎年世代が変わる南中でいいと思うんですけど、元祖の南中ソーランを引き継ぎ続けているのは南中ソーラン連だと思います。

⑥南中ソーラン連の組織運営の現状と課題

１）ソーラン連内における力量差

かなり前の力量の差って言ってたじゃないですか？力量の差は正直あるんですよ。こっちで踊り続けている人は３回踊っても疲れないけど、札幌からいきなり来たやつは１回踊で疲れちゃう。そういう体力の差とかはあるんですけど、一番おこっちゃいけない差がモチベーションなんですよ。連としてYOSAKOIに出たときに、発生したのが、４月から練習初めて６月の本番までに３回か、４回ぐらいしか出れなかった子がいて、その子がずっと札幌で大して練習も出られなかったのに、出ていいのか？っていうモチベーションの下がり方をしちゃって、札幌組は結構そういう節があったんですよね、そういうモチベーションの変化はたぶん支部ができて、練習ができればいいと思うんですけど、ただそれだけだと踊りたい方の気持ちになってくるんですよね。

２）南中ソーラン連の置かれている現状

（2010年の）上海万博をきっかけに依頼が来て、「ここで踊ってほしい」、「ここで踊ってほしい」が今ここまできているので、それが途切れたらたぶん「連」はなくなると思います。「連」というよりは「サークル」になって終わると思います。

３）南中ソーラン連の組織的な課題

世代交代じゃないですかね、毎年２，３人しか入ってこないですからね。それでよくここまで続いているなと思っています。世代交代よりも問題なのが、出身中学校ですね。南中ソ

ーラン連を南中ソーランの定義とかにかかわってくるんですけど、「南中ソーラン踊ってるのに、南中生いないってやばくない？」って話はしてます。外から見たらみんな「南中生」だと思われちゃいますからね。

４）今後の南中ソーラン連の展開

札幌で支部作りたいってＥくんの世代の子から言われたんですけど、そういう知識がなかったんでちょっとそういう勉強してからやらせてっていって今保留してます。ただ、集まれんのが５，６人って聞いて、そんなんで支部っていっていいのかなとか、札幌で依頼がある可能性が低いからちょっと待とうといって今代表と相談してます。

⑦「南中ソーラン」の今後に思うこと

どんな人でも踊れる踊りを目指したいです。今僕の耳に届いているものでいうと、車いす、知的障害、盲目、までは踊っているんですよね。そこまでは踊っているので、盲目の方とお話ししたら、僕らが踊れたらたぶん世界中どこにいる人でも踊れるから、目が見えなくても踊っているんだよ、動きなんて一回も見たことないけど、見様見真似っていうか、教えてもらった踊りを踊れているから、そういう踊りを開発したり知的障害の方に教えるのがすごく大変だったので、回転の動きとか、上下の動きとか、大きくすればするほど自分の場所がわからなくなって、すごいことになったので、「ユニバーサルソーラン」っていうものの構想はあります。

２－３－２．Ｃくん、Ｅくん～Ｈさんへのインタビュー調査

前項で提示したＤ君の予備調査を受け、以下ではＣくん、Ｅくん～Ｈさんの５名に「南中ソーラン」との出会い、「南中ソーラン連」における現状、ミラノ万博などにおける海外での経験など８点にわたる半構造化インタビューを行った。得られた結果を下記にまとめて提示する。

①「南中ソーラン」の魅力

かっこいいなって思ったのが1番最初で、着てるものも「舞祝着（まいわいぎ）」っていう名前を知らなくても着てる柄とか真面目ななんていうか、変わるじゃないですか表情が、踊る前の中学生とか模擬店とかのふざけてて踊り始めるとすごいかっこよくて、そういうのもなんか印象に強くて、かっこいいって思ったのと、やってみたいなって思ったのはあります。（Ｅくん）

自分が思うソーランはなんて言うんですか、野球とかも上目指せば上目指すほど、まぁ限界がないんですけど、ソーランに関しても同じ感覚で、踊るじゃないですか？一通り踊れるようになってそこから音楽自分の体に身につけて、その音楽の間に自分の感覚を合わせるので最後ちゃんとピタッと止まったら、ちゃんと身体の中に音楽が入ってるって自分の中で思ってるんですよね。それやるじゃないですか。それやるじゃないですか、で、今度自分の踊

り極めるために自分の場合入った理由のひとつに一人自分が一番うまいと思う踊り子がいるんですけど、その人かっこいいと思って入ったんで。その人に近づこうと頑張って、で、頑張ってやってそっからその人先輩なんでいなくなっちゃうんですけど、その人大学行って自分が今度リーダーになって、自分の踊りってどうやってやるんだろうなって考えながらどんどん高みに上がってくのが何よりも楽しかったですかね。（Fくん）

②「南中ソーラン」を踊る目的

お客さんの拍手です。お客さんの拍手とでかい舞台に立てた時。お客さんの拍手がなくても。それさえあれば全然。まず見てくれる人がいるだけで俺の場合いいんですけどね。そんな拍手くれなくても。拍手くれないのは自分たちの踊りがまだまだっていう評価っていうことなんで、そしたら課題がみつかりますよね。そこからまた上手くなってけるんで、お客さんに見てもらえるだけでも、俺が拍手させるくらいの勢いで踊ってるんで自分の場合。（Fくん）

この踊りはかなりハードだけどみんなで頑張る踊りで、一人でもできない感じの踊りだけどみんな一緒にやると、なかなかできるみたいな感じになります。家で一人で練習してもソーラン練習みたいな練習はできない。でもみんながいるから、みんな頑張ってるから一緒にできるみたいな感じ（Hさん）

正直なんのために踊ってるとか最初のとき全く考えてなくて、ただ自分が踊りたいって思って踊ってるだけで、褒められて嬉しくてまた頑張ろうっていうその繰り返しだけでやってきたんですけど、でもなんかその本番依頼されて踊っていくごとに泣いてくれる人とか、あとはすごい拍手して、すごいねとか、かっこよかったねとか、アンコールとかもかけてくれるところもあるし沢山盛り上がってくれる人たちがいて、本番毎回出るごとにこうやって喜んでくれる人いるし、なんかそういう自分のためだけのものじゃないのかなって思って。（Gさん）

③異文化で演舞した経験

（ミラノ万博での演舞は）言葉にはできないです。実際写真見ても実感わかなくて、動画みてもどっちかっていうと自分の踊りのどこがまずいかっていうところ探すくらいでイタリアにいって踊ったからどうこうっていうのはあっちに行った時は１つの踊りで世界と繋がったってところと（伊藤）多喜雄さんとかと一緒に踊れたことが自分にとってのソーランを上手くする経験値になったんじゃないかなっていう風に考えて、イタリアで踊り終わった後は忘れないうちに早く帰って練習したかったってくらいの勢いですかね（Fくん）。

毎日５回踊って、それでも頑張ってみんなで･･･とっても楽しかったです。自分の踊り、自分の街の踊りを世界に見せることがとっても嬉しかったです。言葉にするのが難しい。（H

さん）

ギリギリまで札幌行くバスまで実感がなかったんですよ、自分が海外で踊るっていうことに。で、緊張感もあんまなくてこのままどうしようって思ってて自分でも緊張感ないのに気付いて。（…中略…）（万博での）本番一回目でお客さんが日本人じゃなくて外人だったから全然違うって思ってソーランを知らないからそんな手拍子とかしてくれたりとか全然盛り上がらなくて最初はなんか、だけど司会の方が盛り上がるように掛け声とか教えてくれててそこで盛り上がっててなんか踊ってる時とかも自分って海外で踊ってるんだなってやっとそこで実感して、１回目は緊張しかなくて終わっちゃったんですけど。だけど、１日５回踊ってて毎回毎回踊っていくごとに雰囲気にも慣れてきて、万博内と、クッカーニャっていうところで踊ったんですけど、クッカーニャのところ場所小さかったんですけど盛り上がり方がすごいよくて、頑張れば頑張って踊るほどお客さんも盛り上がってくれるし、緊張っていうより楽しいしかなくて、そこから日本とはまた違う盛り上がり方だったからすごい楽しかったし、何回でも踊りたいって、身体はあんまりついて行かなかったけど気持ちがすごい上がってたから、何回でも踊れました、あの時。（Ｇさん）

（2010年の上海万博は）最高に楽しかったですね！！あれほど笑ったことはなかったですね。めっちゃ楽しかったです。（上海での反響は）ここ（稚内）とは比べ物にならなかったですよ。こっち（稚内）はある程度目が肥えてるし、何回も見てるって人がいっぱいなんで、でもまぁ、やっぱりこっちの人はソーラン好きなんで、拍手くれるんですけど、なんかそれよりも違った盛り上がり方っていうか、拍手の音のレベルが違ったんですよね、歓声とかも全然違うし･･･写真撮ってくれとか終わったあとに結構ありますし。（スターみたいな）もう本当そんな気分ですよね。（Ｃくん）

（2011年に派遣された袖ヶ浦では）「南中ソーラン」と一口に言ってもソーランってすごいいろんなのがあって、南中ソーラン踊る前に組体操やってるところもあったり、なんかよくわかんない地区の踊りをちょっと取り入れてからソーラン始めてみたりとか、「かまえ」無しにいきなり「波」から始めたりとか、「南中ソーラン」と１口にいっても、僕らがやってるのだけじゃなくて奥が深いというか、住んでる場所の文化が違うだけでいろんな多種に渡って踊りが存在してるのがすごいと思いました。それが普通なのかわからないですけど、僕の中で衝撃でした。こんなにあるんだって。（Ｅくん）

④型を意識しつつも試行錯誤を繰り返す踊り

（自分の踊りについて）考えてるときは辛かったです。まず、自分の踊りについて。誰も教えてくれる人がいないから、自分で答え出すしかないし、下の子達には教えなきゃいけないしで、結構辛いなって思うときもありましたし…中略…実際ソーランとか、限界ないのかなって思います。（筆者：限界がないのに極めるって大変ですよね？）大変ですよ、でも大変ですけど、そ

れを考えるのがソーランの楽しさでもあるのかなっていう風に思うんで、まぁそういうのがあってもいいんじゃないのかなって感じです。（Fくん）

型もそうですし、代々受け継がれてきたものを今は全く一緒ってわけじゃいですし時代、時代によってソーランは変遷してるんですけど、僕らはそれを受け取って、またこう新しく時代の流れに乗って、受け取った人たちって感じですかね。ちゃんとしたソーランっていうのは受け取った僕らのソーラン？僕らが作ってるものがちゃんとしたソーランっていうふうに思います。（Cくん）

⑤南中ソーラン連での活動を通じた地域や学校に対する意識の変容

全く知らない大人と話すことも多くなったんで、なんかその考え方っていうか、幅が広がったっていうか、自分の知らないことがいっぱいあるし、知らない人もいっぱいいるし、あったかい人もいっぱいいるんだなって思いました。地域には知らない人もいい人もたくさんいるんだなって、だからもっと踊りたいなって見せたいなって思うし、期待されてるならその期待に応えなきゃなとも思います。（Eくん）

ミラノ行ってから自分が実感ないときに「ミラノ行くんでしょ」とか「海外行って踊ってくるんでしょ」って言われて、軽い気持ちで「そうなんだよね」ってこと言ってて、踊って帰ってきた時にそうやって「なんでみんな知ってるんだろう」って思ってて、新聞とかみてみんなに言われて（Gさん）

⑥「南中ソーラン連」の今後の課題

今年の夏の「総会」でようやくやったんですけど、まだ団体として「ふわっとしてる」と思います。あるのかないのかはっきりしてないので、来年新しく入ってくる人をどう確保するのかっていうところも安定してないんですよね、団体として安定性に欠けるっていうのが課題ですかね。（…中略…）本当はもっと地方とかいろんなところで踊らせてもらってっていうのもしたいし、地域の小・中学校、今、どの学校でも踊ってると思うんですけど、踊れる、教えれる先生がいないっていう現状なんですよね。正直、南中の先生も、もしかしたらそうなのかもしれないんですけど、正直教えられないし、面倒だなって思ってる先生はいるっていうのはわかってるんですよね。だったら尚更そういうところへソーラン連が入っていけないかな、市内の小中学校への指導を僕らが引き受けられないかなって思ってますね。（Cくん）

２－３－３．考　察

以上、Dくんの予備調査、「南中ソーラン連」メンバーへの調査から上記ではその「語り」を引用してきた。これらの語りを受け、７点にわたり考察しておきたい。

第１に、「踊りの変化」についてである。一見すると、南中ソーランは「波」、「ろこぎ」、「綱引き」などの決められた動きを繰り返しているように見える。全国的な「指導書」や「実技書」などを見る

限り、「南中ソーラン」の踊りの変化については語られていない。しかしながら、Ｄくんの言うように年代別、それも10年スパンで見てみると志向している「踊りの変化」に気付くことができる。例えば、「全国民謡民舞大賞で内閣総理大臣賞を受賞した演舞」と「現在の『南中ソーラン連』の演舞」は、「腰の位置」を比較すると現在の方が明らかに低い。さらにこうした変化させることができる点は、技術追及の喜びを生み出すと推察される。Ｆくんの語りの中で「大変だけど、それを考えるのが楽しい」という語りに見られたように、自分たちの踊りを創造することができる、つまり解釈の余地が踊り手にある点が「南中ソーラン」の魅力の1つのなっていると考えられる。こうした点は「競技スポーツ」に魅力を感じる競技者の心理と類似する部分が多いと推察される。

第２に「南中ソーラン」のプロとしての葛藤である。Ｄくんが言うように「（南中）ソーラン連としての踊り」と「全国１位（1993年「全国民謡民舞大賞」受賞）を取った時の踊り」を体現できる唯一の団体である。しかしながら「３年間」という時間的制約の中で３種類、４種類の踊りをこなす時間的なゆとりも多いとはいえない。「南中ソーラン連＝高校生中心」の団体であるが故の葛藤の1つと言える。

第３に、「南中ソーラン連」個々の力量差についてである。「南中ソーラン」は、稚内やその周辺部では抜群の知名度を誇り、老若男女に親しまれているものの１つである。そのため、稚内近郊では、「南中ソーラン連」として演舞を依頼され、演舞を披露する機会に恵まれている。しかしながら、「南中ソーラン連」、さらに言えば稚内の高校生の多くは、就職、進学と同時に稚内を離れるものも少なくないが、「南中ソーラン」への情熱を失っているわけではない。そうした際に「『南中ソーラン』を踊りたい、でも『南中ソーラン連』の練習には地理的な問題から参加できない」という問題が発生する。

第４に、第３の課題とも対応するが、Ｄくんの語りにもある「札幌組」をどう扱うべきかという問題が浮上する。札幌組と稚内組との間には必然的に「モチベーションの差」、「踊りの差」などが発生してしまう。ここでの最大の問題は、「どの程度の『踊りの力量』を担保しなければならないのか」という基準をどこに設定するかが問われてしまう。レベルを下げると先に指摘した「プロ」としての価値が低下してしまう、その一方でレベルを上げすぎると「札幌組」や、さらに「新入生」の加入が見込めない踊り手が不足する事態となってしまう。ここに「南中ソーラン連」としての１つの矛盾がある。このような矛盾を解決する１つの方向性として、Ｄくんの述べた「ユニバーサルソーラン」や、2015年12月16日に市民向けに開講された「稚内学」の「南中ソーランを学ぼう・踊ろう（講師：南中ソーラン連会長岡田氏）」であろう。南中ソーラン連として「南中ソーランを極めるベクトル」と「南中ソーランを大衆化・普及するベクトル」、このような２つの志向性を持つことが重要と推察される。

第５に、「異文化での演舞経験の重要性」である。2010年の上海万博、2015年のミラノ万博、2011年の袖ケ浦市、被災地への派遣事業などを経験してきた「南中ソーラン連」メンバーは、道外や海外において、「稚内」とは異なる観客、日本人とは異なる観客の反応を経験してきた。ＦくんやＨさんが「言葉にできない」という語りの深層心理を創造することは、そう難しいことではない。稚内というローカルから出発した伝統芸能を発信し、同時に世界の目を受容してきた彼・彼女らの経験は、これからの稚内を背負って立つ大きな財産となるであろう。

第６に、地域に対する意識の変容である。とりわけ、今回ミラノ万博へ派遣された高校生の語りから地域への意識の変化が読み取れる。例えばＧさんの語りにあったように、「『海外行って踊ってくるんでしょ』って言われて、軽い気持ちで『そうなんだよね』ってこと言って」た彼女が、「踊って帰

ってきた時にそうやって『なんでみんな知ってるんだろう』って」思ったという語りが象徴的であろう。ミラノへ行くまでは、万博へ行くという「事の重大さ」に気付けておらず、どこか「軽い」気持ちで「実感のなかった」彼女が、帰国後地域の人が「みんな知ってる」という事実に驚かされ、「なんでみんな知ってるんだろう」という問いが生まれ、地域への意識が変容しているものと推察される。

第７に「南中ソーラン連」という「組織」の問題である。「南中ソーラン連」の構成員は、30代が１人、それ以外は22歳以下のメンバーで構成されている非常に若い組織である。Ｃくんの語りにあるように「ふわっとした組織」という感が否めない。そのため「会計処理」、「講師派遣」など様々な部分で手探りでの運営が続いている。その一方で「南中ソーラン連」に対する地域、行政サイドからの期待値は大きい。そのため、「組織づくり」が不十分であるのにもかかわらず、地域から求められることを遂行しなければならない状況、すなわち「背伸び」をしながらの組織運営が継続している。また前節でみたような「学校サイド」から「南中ソーラン連」に対する期待も多い。しかしながら、高校生や社会人中心の組織運営では、自由な時間を取り指導に出向けるのは「学生」メンバーくらいしかおらず、学校と「南中ソーラン連」の双方の需給バランスが上手くかみ合っていないといわざるを得ない。今後稚内市の伝統芸能として「南中ソーラン」を位置づけていくためには、「教えられる人材」、「南中ソーランを保存していく人材・組織」の２つをきちんと整備していく必要があると考えられる。

おわりに

本稿では、稚内発「南中ソーラン」を「郷土芸能（文化活動）」の１つとして位置づけ、「南中ソーラン」の今日的課題の解決に向けた基礎的な方向性を提示することを目的としていた。その結果、本稿では、本学学生、現職教員、南中ソーラン連の学生への調査から５点の示唆を得られた。

第１に、「『南中ソーラン』を伝承する仕組みづくり」についてである。学校現場では、「南中ソーラン」の創設期を知る教員が、定年を迎え退職していく。こうした状況下において、「南中ソーラン」を伝承させていくためには、学校、行政、地域の３者がより緊密に連携し、「南中ソーラン」という文化を伝承していくための方策を共に考え、実践して行く必要があるだろう。現在のような、一部の保健体育科教員や、教えられる教員の力量に頼っていては、今後の南中ソーランの存立基盤は大きく揺らいでいく可能性を否定できない。

第２に、「南中ソーラン連」をはじめとする「南中ソーラン」、とりわけ「全国民謡民舞大賞（内閣総理大臣賞）」を受賞した際の踊りを「指導」かつ「演舞」できる人材の育成が複数名必要となるであろう。調査対象者のＤくんのように「１人で５パターンの南中ソーランを踊れる」ような「プロ」に近い人材がいないわけではない。多くの伝統芸能や郷土芸能で「○○保存会」のような形で保存していこうという動きが見られる。「南中ソーラン」が誕生してから20年以上の歳月が過ぎた今日、今後はこうした伝統芸能・郷土芸能の先行事例にならい、「南中ソーラン」のいくつかの踊りのパターンを「保存」する仕組み、踊り手を育成するような仕掛けづくりも必要である。１つ現実的な方法論としては、「南中ソーラン連」をこうした目論見の中に位置付けていくことも有効であろう。

第３に、「南中ソーラン」における志向性の違いをどのように折り合いをつけていくのかである。すなわち「郷土芸能としての質」と「学校現場で踊る質」、この２つは大きくベクトルが異なる。教育を目的としているのであれば、「楽しさ」や「個性」を尊重した踊りが優先される。一方、郷土芸

能ということになれば、「踊りの解釈」、「踊りの変化」、「踊りの質」といったすべてを１つ１つ確認し、高めていく作業が求められる。ただ「南中ソーラン」の難しい問題の１つは、稚内南中学校が「南中ソーラン発祥の地」であり、「本家」であるという変わらない事実性である。そのため稚内南中学校の「南中ソーラン」には、本学学生や「南中ソーラン連」からの調査でも見られたように、注目され、さらに厳しい批判の目が向けられてしまう。

第４に、「体力科学面」からの再検討である。教員の語りの中でも見られたように発達段階の中学生にとっては、「ウサギ跳び」をさせているような時代錯誤と思われる節がないわけではない。「伝統芸能の保存」と「運動科学的観点から見た非科学性」をどのように融合させるかも今後の再検討する必要がある。とりわけ中学生に「アンコール（再演）」をかけるのは、運動科学的な観点から見ると、地域住民の「悪しき慣習」である。同時に踊り手の側にも、南中ソーランに向けた「体力づくり」を実施させることで、突発的な事故やケガの防止につなげていく共通了解を作る必要があると推察される。

第５に、「外部との交流の機会の増加」である。現在、「南中ソーラン袖ケ浦派遣団」による千葉県袖ケ浦市への派遣事業は行政都合により中止となり、さらに「南中ソーラン全国交流祭」も「全国」と冠がつくには寂しい参加の現状となってきている。現在の稚内市内の小・中学生は外部との交流をする「経験の場」が徐々に少なくなってきていると言わざるを得ない。一方で「南中ソーラン連」メンバーの語りから、彼・彼女らが稚内（宗谷管内）では味わうことのできない大きな経験を道外や海外で得ていることは疑いようがない。稚内のローカル文化である「南中ソーラン」を、一度「客観視」、「相対化」するような経験を中高生や若者に与える機会を増やしていく必要があると考えられる。

最後に本稿の限界と今後の課題を４点ほど述べておきたい。第１に「子育て運動」と「南中ソーラン」の連関については、後段での１番の検討課題である。今回の調査によって、「南中ソーラン」と地域の結びつきが改めて重要な視点であることが示唆された。今後は本稿における指摘を踏まえながら「子育て運動」との関係性を検討する必要がある。

第２に、「南中ソーラン」の理論的な検討である。今回は「南中ソーラン」の今日的課題を把握し、解決に向けた基礎的な方向性を探ることを目的としていたため、踊り、舞踊などの身体論的な検討や、地域づくりとの連関を視野に入れた理論的な検討は行っていない。郷土芸能の検証という観点からは鶴見俊輔（1991）の『限界芸術論』が示唆に富むと考えられ、「踊りの変化」や「技の伝承」という観点ではP. ブルテューの実践論、ハビトゥス論の視角からアプローチが可能であろう。また身体技法と社会学的な解釈という観点では、倉島哲（2007）による身体技法論の研究が有益であると推察される。

第３に、他の伝統芸能、郷土芸能の事例から学ぶことも必要と考えられる。特に「踊り」の事例研究という観点では、郡上八幡の「郡上おどり」を社会学的に分析した足立重和（2003、2010）の指摘は示唆に富む。現在の「郡上おどり」は、観光化されてしまい、地元住民から「風情」が無くなったという指摘絶えない。足立はこの点に着目し、そこから地域住民のリアリティを描き出した。彼の一連の研究は、稚内の「南中ソーラン」を検討するうえでも有益な先行事例となりえる。

第４に「南中ソーラン」の「踊りそのもの」に着目した動作学、解釈学的な研究である。この点に関しては、今後稚内で南中ソーランを踊った経験のある踊り手の中からこうした研究を志す若者が出現することを期待している。特に「南中ソーラン」の「型」など客観化、言語化するのが難しい部分

をどのように解釈するのかは今後に残された課題であるものの南中ソーランの伝承という長期的なスパンにおいては意義深い作業となりえる。

以上のような課題と期待を踏まえ、今後も単に体育学、踊りとしての視野にとらわれない「南中ソーラン」への学際的、継続的なアプローチが必要となってくるであろう。

●註

（1）例えば、一般的な指導書の『まるごと日本の踊り小学校運動会 BOOK 演技編』では「南中ソーラン」について下記のように記載されている。以下に引用する。

南中ソーランは、北海道南中学校が「学校崩壊」の危機から脱出し、学校再生へ向けてさまざまな取り組みを行う中で生まれた踊りです。以前はゆっくりした「ソーラン節」を踊っていましたが、それでは現代の子どものテンポにあわない。そこで民謡歌手・伊藤多喜雄氏によるソーラン節「Takio'S SOHRAN ２」をバックに踊ることになりました。はじめは以前のソーラン節の振りに教師（伊藤十夢氏）がアレンジを加えたものでしたが、福岡県の春日流家元春日壽升氏の力を得て、今の振り付けになったそうです。南中生徒によるソーラン節は、1993年の「第10回民謡民舞大賞」で見事優勝を飾り、その後、多くのテレビ番組などで紹介されたこともあって、次第に全国にその存在を知られるようになりました。

（2）前掲書においては、「カニ歩き」と記載されている。「南中ソーラン連」、稚内南中出身者は「ボックス移動」ということが多いため、本稿では後者を採用する。

●参考文献

阿部未幸、2014、「地域における郷土芸能の役割と今後の可能性－岩手県岩泉町「中野七頭舞」を事例として」

足立重和、2004、「地域づくりに働く盆踊りのリアリティ―岐阜県郡上八幡町の郡上踊りの事例から－」『フォーラム現代社会学３』：83－95.

－2010、『郡上八幡　伝統を生きる－地域社会の語りとリアリティ－』、新曜社.

軍司貞則、1999、『荒れ放題の「稚内南中学」を甦らせた教師たちの奮闘物語　学校再生』、小学館.

桂博章、2009、「身体運動を通した郷土芸能の学習効果－秋田県『西馬音内盆踊り』の場合」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』31：19-28.

倉島哲、2007、『身体技法と社会学的認識』、世界思想社.

黒井信隆、前田雅章編著『まるごと日本の踊り小学校運動会ＢＯＯＫ演技編』、いかだ社：pp30-59.

名古屋大学教育学部教育経営学研究室「宗谷ゼミ」ホームページ

http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~souyazemi/（2016年１月12日）

大塚美栄子、土岐勝浩、前田和司、1993、「農村地域の中学校における郷土芸能の学習について：北海道上川郡朝日町－朝日中学校における瑞穂獅子舞の学習を中心に」『僻地教育研究』47：93-103.

佗美靖、森谷絜、2005、「YOSAKOI ソーラン祭り参加による運動量増加と体力の向上」、『日本生気象学会雑誌』42（４）：145-157.

恒吉紀寿、1993、「地域子育て運動の展開構造－宗谷の合意運動への自己教育論的接近」北海道大學教育學部紀要61：143-197.

鶴見俊輔、1999、『限界芸術論』、筑摩書房.

稚内市立稚内南中学校ホームページ　http://www.nancyu.info/（2016年１月12日）

稚内南中学校・南中生徒会・南中 PTA、2012、『学校創立60周年記念誌「若き希望に～稚内南中の理屈のない教育実践～Ｑ＆Ａ」』

吉岡亜希子、2010、「稚内市子育て運動における父親の学びと組織づくり -- 地区別特性に注目して（その１）」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』111：129-150.

●謝　辞

本稿の調査の調査対象者となって頂いた学校教員、「南中ソーラン連」の皆様の調査へのご協力に対して深謝いたします。また調査データのテープ起こしや分析作業に協力いただいた若原･佗美ゼミのゼミ生の協力にも感謝いたします。なお本稿は、平成27年度稚内北星学園大学 COC 事業「地域志向教育研究経費（採択課題：『南中ソーランの今日的意義と課題の検証（研究代表者：佗美俊輔）』」より研究資金の助成を受けて執筆されたものである。

●Title

Verification of today significance and Issues of the "Nanchu-Sohran" ①

●Abstract

“Nanchu-Sorhan” was born in the Wakkanai South Junior High School, and won the Grand Prix（the Prime Minister's Award）in the 10th " folk people Dance Awards National Convention ", which was held in 1993. Then” Nanchu-Sohran” was picked-up in a variety of media and event, and it was danced（in Japanese “Embu”）in 2015 of Milan Expo. Today, "Nanchu- Sohran" starting from a local city of Wakkanai, is one of the local entertainment that has been calling to the world.

This paper is presented basic directions towards solving the contemporary issues as positioning “Nanchu-Sohran” to "local entertainment". This paper, beyond the "dance area" of health and physical education, multi-layered analysis that incorporates the perspective of the inclusion of the school and the community "community development", which is the first report to attempt a discussion.

●Keywords

Nanchu-Sohran, Local entertainment, youth, dance, Social education, school education